



パナマの障害者やその家族を対象にキーホルダーの作り方などを教え、社会参加を後押しするJICAボランティアの活動現場を視察

ボランティア活動の武器となる 技術を身に付けてほしい

JICAボランティアの活動を支える青年海外協力隊事務局。環境問題の解決に挑むボランティアをサポートする中村史さんは、彼らの活動の幅を広げるための研修にも力を入れている。

シルクロードの世界に 魅了される

小学生のころ、シルクロードを旅するテレビ番組を見ていて、現地の人たちの暮らしや活気あふれる市場など、日本とは違う生活に興味を持ちました。大学時代には東南アジアやヨーロッパなどを回り、3年生の時には、タイ北部に暮らす少数民族の暮らしを間近で見てみたいと、NGOで3カ月間のボランティアに参加することに。学生寮で暮らす子どもたちが勉強に専念できるよう、食事の管理や掃除などを手伝いました。しかし、その地域には中学校や高校に行けない子どもも多くいました。家のお手伝いをしなければならなかったり、学費を払えなかったり……。みんなが学校に行けるようになるためには、親に教育の重要性を分かってももらい、収入を増やすための支援が必要なのではないか。一度は貿易会社に就職したもののその思いが消えず、JICAに転職しました。

議論が円滑に進むよう 陰から支える

2007年からはヘルー事務所へ。経済発展に伴い環境問題が深刻化していたため、環境省が新設されたところでした。まず同省が取り組もうとしていたのがごみの問題。当時、国内に衛生処分場が不足し、ごみ捨て場にはむき出しのごみが放置されていました。



そこで、日本の協力を得てごみ問題を解決できないかと要請があり、環境分野の協力を担当していた私も話し合いに参加することになりました。衛生処分場の普及による環境改善を目指す環境省、ごみの収集に苦戦する地方自治体など、多くの関係者が集まり、どう取り組むのがベストなのか検討が始まりました。私も関係者に毎日会って議論を繰り返して、ごみの運搬やリサイクルなど、項目別に問題を話し合う場を設けるなどして調整を図りました。

1年かけて方針を固め、衛生処分場の建設だけでなく、回収、運搬、リサイクルの促進など、包括的な廃棄物管理を全国規模で進めることになりました。その次に取り組んだのが住民たちへの啓発活動です。ごみの処理には彼らの協力が不可欠。ごみの回収やリサイクルの重要性を住民や子どもに伝えるJICAボランティアを、それぞれの村に派遣しました。

ボランティアの 現場の力を引き出す

帰国後は青年海外協力隊事務局に配属になり、再びヘルーのボランティア派遣を担当することになりました。引き続きこの国に関われることをうれしく思っています。

ヘルー以外にも、中南米で環境問題の解決に取り組むボランティアをサポートしていますが、特に力を入れているのが技術研

JICA青年海外協力隊事務局
中南米課

中村史
NAKAMURA Fumi

大学院卒業後、貿易会社に就職。退職後、2002年にJICAに就職。JICA中国、農村開発部、ヘルー事務所を経て、2011年7月から現職。

修。環境先進都市である北九州市の関連団体に協力を得て実施しています。物が限られている途上国でも、もみ殻や果物の皮など、現地で手に入るもので生ごみを分解して堆肥を作るコンポスタの活用法はぜひ学んでほしい。住民たちの信頼を得て、活動の幅を広げるきっかけになると考えているからです。

そうして送り出したボランティアからは、「同僚が協力してくれない」など、悩み相談を受けることもあります。そこで中南米地域で活動するボランティアとその同僚を対象に、北九州市の専門家が直々にコンポスタの技術や環境教育の成功事例などを共有する研修を定期的に実施しています。「同僚の理解が深まり、やる気を見せてくれるようになった」と言ってもらえた時はほっとしました。

「途上国の役に立ちたい」という思いを持って活動するJICAボランティアの力になれるよう、これからも全力でサポートしていきます。



ヘルーの農家の生計向上を目指して農業機械を導入